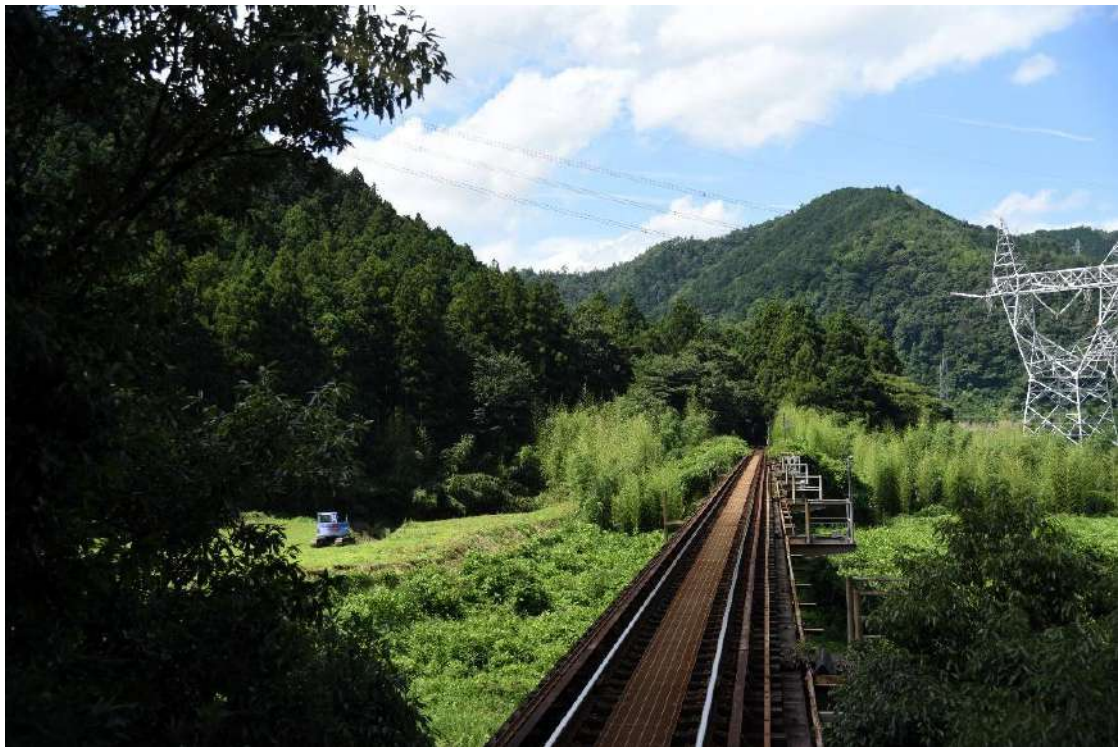


「高校が遠い」という現実…データで見る、中山間地から高校に通う大変さ



山あいを走るローカル鉄道の線路

私たち山学が中山間地の無人駅で開く学習支援の場に通う複数の生徒が、この春、高校生になった。ある生徒は、直線距離で約 25 キロ離れた高校に通う。鉄道 2 路線を乗り継ぎ、約 1 時間半をかけて通学しているのだという。入学してまだ間もないころ、帰り道に途中下車して無人駅に入ってきたその生徒が、「つかれたー」と言いながら机に突っ伏す姿が印象に残っている。

この生徒が特別というわけではない。別の新高校生も 25 キロ離れたほかの高校に、また別の生徒も 18 キロ離れた高校に、それぞれ通うようになった。

中山間地から高校に通うということは、いったいどれほど大変なのか。その実情を可視化するため、県内の小学校（義務教育学校を含む）347 校と高校 88 校の直線距離をデータ化して比較した。

調査概要・手法は？

⇒ジオコードをもとに直線距離を算出

調査対象の小学校・高校は、岐阜県教育委員会が所管する[岐阜県総合教育センター](#)のホームページにある学校一覧を参考にした。小学校は学校一覧に掲載の小学校 340 校（岐阜地区 101 校、西濃地区 68 校、美濃地区 39 校、加茂地区 40 校、東濃地区 58 校、飛騨地区 34 校）と義務教育学校（小学校課程から中学校課程までの 9 年間の義務教育を一貫して行う学校）の 7 校を対象とした。また、高校は同センターの一覧に高等専門学校 1 校を加えた 88 校（岐阜地区 20 校、西濃地区 12 校、美濃地区 6 校、加茂地区 7 校、多治見地区 7 校、恵那地区 8 校、飛騨地区 6 校、私立 21 校、高等専門学校 1 校）を対象とした。令和 6 年 4 月 1 日現在の一覧のため、それ以降の統廃合・新設は加味されていない。

今回の調査では、各小学校から最寄りの高校 3 校までの直線距離を計測し、市町村ごとの平均としてデータ化した。進学先の高校を選ぶにあたっての選択肢がどの程度あるかを把握しやすくするため、最寄りの 1 校だけではなく 3 校までの距離を調べた。

手法については、まず、上記学校一覧に掲載された住所をもとにジオコード（緯度・経度情報）を取得した。取得にあたってはジオコード検索サイト [Geocoding](#) を使った。Geocoding 上で学校住所を入力したところ地図上の学校所在地と一致しないケースが複数あり、そうした場合は住所ではなく学校名からジオコードを取得した。取得したジオコードのリストを ChatGPT-4o（Omni、オムニ）に読み込ませ、直線距離を算出した。

なお、今回の調査はあくまで直線距離しか算出しておらず、アクセスのしやすさを大きく左右する公共交通機関の有無や運行本数、道路の状況・起伏といった事情については考慮していない。また、測定したのは直線距離のため、一般的には実際の移動距離はさらに長くなる。

データ①：最寄りの高校までの平均距離は？「一番近くの高校が 27 キロ先」の場合も

まず、小学校から最寄りの高校までの平均の直線距離が長い市町村・短い市町村をそれぞれ調べた。結果は以下の通りだった。

最寄りの高校までが遠い市町村			
市町村名	最寄りの高校 までの平均距離	2番目に近い高校 までの平均距離	3番目に近い高校 までの平均距離
白川村	27.1	32.2	33.8
東白川村	19.0	21.4	22.1
白川町	17.5	19.7	20.4
七宗町	10.9	12.7	13.8
下呂市	9.8	24.4	27.1
(単位：km)			

最寄りの高校までが近い市町村			
市町村名	最寄りの高校 までの平均距離	2番目に近い高校 までの平均距離	3番目に近い高校 までの平均距離
岐南町	1.2	1.9	2.3
北方町	1.4	2.1	2.1
御嵩町	1.5	4.0	4.9
岐阜市	1.5	2.2	2.7
大垣市	1.6	2.6	3.1
(単位：km)			

小学校から最寄りの高校までが遠いのは、山間部の自治体が目立った。白川村は白川村立白川郷学園が村内唯一の小学校・義務教育学校で、最も近い吉城高校（飛騨市）まででも約 27 km の距離がある。実際には山を回り込むように道路が走っており、移動距離はさらに長い。

白川村のほか、最寄りの高校までの平均距離が 15km 超という自治体は 2 町村あった。こうした自治体では、中学校卒業後に下宿をして高校生活を送る学生も一定程度いると見込まれる。

一方、最寄りの高校までが近い自治体では、直線距離にして 1.5 km 程度というケースが並んだ。

通学距離に関しては、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令において「小学校にあってはおおむね 4 キロメートル以内、中学校及び義務教育学校にあってはおおむね 6 キロメートル以内であること」と定められている。高校はこの基準に該当しないが、15～20km 超を毎日通学するような状況は、かなり大変な部類に入ると言えるだろう。

データ②：最寄りの高校と 3 番目に近い高校との距離差は？

進学先の選択肢の多寡を探る

では、最寄りの高校までの距離が短い市町村はすべからく、進学する高校の選択肢が豊富な状況だと言えるのだろうか。答えはそうではなさそうだがということが、集計データから垣間見える。

そこで、高校進学の実選択肢の多寡を可視化するため、最寄り高校と 3 番目に近い高校との距離差が大きい市町村を調べた。

最寄りの高校と3番目に近い高校までの平均距離差が大きい市町村				
市町村名	最寄りの高校 までの平均距離【A】	2番目に近い高校 までの平均距離	3番目に近い高校 までの平均距離【B】	距離差 (B - A)
郡上市	6.5	17.7	26.5	20.0
下呂市	9.8	24.4	27.1	17.3
飛騨市	6.4	14.9	18.5	12.1
関ヶ原町	4.5	9.7	11.5	7.0
白川村	27.1	32.2	33.8	6.8
(単位：km)				

距離差が大きい自治体は、郡上市・下呂市・飛騨市となった。郡上市の場合、最寄りの高校までの平均距離は 6.5 km だが、その次の高校は 17.7 km 先、3 番目に近い高校は 26.5 km 先、というように一気に遠くなる状況にある。

下呂市の場合も、最寄りの高校までの平均距離は 9.8 km だが、次に近い高校ですでに 25 km 近く離れてしまう。比較的容易に通学できる高校が地理的に制限されている状況がにじむ。

データ③：周辺に高校が多い市町村は？ 山間部と対照的な状況

こうした状況はいかに大変だと言えるのか。対照的な例として、容易に通える高校が多いという状況を見てみたい。近い高校3校までの平均合計距離が短い市町村を並べた。

近い高校3校までの平均合計距離が短い市町村				
市町村名	最寄りの高校 までの平均距離【A】	2番目に近い高校 までの平均距離【B】	3番目に近い高校 までの平均距離【C】	最寄り3校合計 (A+B+C)
岐南町	1.2	1.9	2.3	5.4
北方町	1.4	2.1	2.1	5.6
岐阜市	1.5	2.2	2.7	6.4
大垣市	1.6	2.6	3.1	7.3
笠松町	1.7	2.6	3.4	7.7
(単位：km)				

上記5市町の場合、3kmあまりの範囲に3校以上の高校がある。こうした環境下では、進学先の選択肢が複数あることが当然に保証されている。

一方、データ②で見たように、20～30kmの範囲にようやく高校3校があるような自治体では、高校選択にあたって「物理的に通えるかどうか」がまず問われる状況にある。市街地と山間部では、高校の選択肢において明らかな前提条件の違いがあると言えるだろう。

デジタル時代に横たわるアナログな制約

今回の分析で明らかになったのは、高校の選択と通学距離において、県内各地で明確な条件の差が存在するという事実だ。個別の小学校ごとに見ても、山間部では最寄りの高校まで20kmを超えるケースが散見される一方で、難なく通える範囲に複数の選択肢がそろっている市街地・住宅街の地域もある。

現代社会は、どこにいても買い物ができ、働くことができ、学ぶことができる時代になったとされる。テクノロジーの進展があらゆる場面で確実に地理的制約を取り除いている一方で、山間部の高校生の目の前には、いまなお距離というアナログな制約が

横たわっている。

言うまでもないことではあるが、ここで一つ強調しておきたいのは、高校の選択肢の豊富さをもって、その自治体の良し悪しが決まるわけではないということだ。今回の調査の意図は、個別の学校・自治体の価値を肯定したり否定したりするものではない。

本稿で示したいのは、中山間地に暮らす子どもたちが高校へ進学する際に直面する物理的なハードルの高さだ。直線距離というシンプルなデータを直視することで、その大変さを感じ取り、サポートのあり方を考えるきっかけにしたいという思いがある。

厳しい制約条件の中をたまたま生きる子どもたちを支えることは、きっと地域の将来の基盤づくりにもつながる。支援の工夫が問われるところだろう。